

平成28年12月5日(月)

老球の細道288号

## 1 1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

父の3回忌、母の8回目の命日、ジェームス・ネイスミス(28日)の命日、娘の結婚と冠婚葬祭に明け暮れた11月であった。誰が言ったか、出会いは別れの始めなり、さよならだけが人生さ。家族も例外ではない。

合間にミニバスケットボール優勝大会が3週間に渡ってあり、ずっと応援してきた坂下ミニバスケットボールチームの県大会出場を果たす感動的な場面に遭遇した。継続は力なり、昨年までボール運びにも難儀していたチームが、まるで別人28号チームに変身してしまった。子どもは、選手はある日突然成長する。もちろん、それまでのコーチ、保護者の日々たゆまぬ指導が功を奏したのは言うまでもない。

### 1・読書から

◆「“なんでできないんだ”と選手を責める言葉は、実は指導者自身が責任を放棄している言葉です。常に自分が発した“言葉”を振り返る。指導のために発した言葉には責任が伴います」〈コーチングクリニック・佐藤善人〉

私自身は自分にかかる言葉には敏感に反応するのに、私から他人にかかる言葉にはとことん無頓着だった。今になって、教え子や知人、そして子どもたちにも「ああ言われた、こう言われた」の嵐。私は全く覚えていない。特に燃えている時の言葉は要注意。

### 2・新聞等のコラム

◆「名を残さなくてもいい。“ぼうず、いい手を持つて”」〈朝日新聞折々のことば〉

本の製本職人が父から言われた言葉である。手間をかけて直せば、本は新しいのちを生きる。本を通して人にとって大事な知識や物語が伝わると、と。バスケットボールの指導においても、急がず、手間ひまかけて本物のアスリートを育てていきたい。

◆「明日という日が、誰にでも来るとは限りません。伝えたい“ありがとう”は、すぐに言わないと後悔します」〈朝日新聞・ひと・岸田ひろみ〉

障害者への「おもてなし」を語る車椅子の講師・岸田さんは、実生活では長男のダウン症、夫の心筋梗塞での死亡、そして自身は大動脈解離で下半身まひの車いす生活。このような人生の転機の連続を経験。幸せな明日など誰にも保障されない。今生きることに全力を注ぐ、何事も今すぐに、早さは誠意。「そのうちに」とお化けにはあったことがない。

◆「男泣きする父の背に手をおきて老人ホームのベッドにふたり」〈朝日新聞・朝日歌壇〉

父の3回目の命日の後で新聞で読んだ。作者は認知症の父親が施設から自宅へ帰りたいと大粒の涙をこぼしながら怒った姿を見て詠んだ。私の父も亡くなる前に病院のベッドから自宅に帰りたいと涙目で訴えていたことを思い出す。今でも後悔ばかり。父母をしっかり面倒見ることができたのだろうか。生きているうちにもっと話しておけばよかった。

### 4・その他

◆「Stay hungry! Stay fool!」(NHKドキュメンタリー番組・ステイブ・ジョブズの講演から)

スタンフォード大学卒業講演で発した有名なキーワード。改めてわが身におきかえて、満足した豚になっていないか、当たり障りのない、わけ知り顔の爺になっていないか。